

アビガン雑感

日本で開発された「アビガン」という抗インフルエンザ薬はいわくつきです。現在、抗インフルエンザ薬としては使用されておらず、薬価も決まっていません。新型インフルエンザのパンデミックが起きて、既存の薬が効かないときに備えて、備蓄されているという位置づけです。汎用薬にならなかったのはアビガンのもつ副作用のせいです。

とくに、アビガンが動物実験で示した「催奇形性」が心配です。妊婦には厳禁、飲んだあとは避妊が求められる。精液中にも分泌される薬なので、服用後は必ずコンドーム使用が必要。このように、たいへん使いにくい薬剤です。

現在、首相やワイドショーは「アビガンが新型コロナに効く」「早く承認を」「軽症の人にも」と強調しています。しかし、「効くという科学的根拠なく危険」という意見書が厚生労働大臣に提出されています。安部首相は新型コロナの特効薬であるかのように言いますが、効くという根拠は実はまだ十分に示せているとはいえません（現在進行中の治験の結果は6月末にまとまる予定と聞きます）。先日承認された米国産の「レムデシビル」との国家の威信をかけた競争とも捉えられます。一種の国家戦略のようにも感じられます。レムデシビルが重症者用なのに対して、アビガンは非重症者にも使える---。うわさでは、アビガンを製造販売している企業グループ、富士フイルムホールディングスの会長は安倍首相とゴルフ仲間のようなのですね。安倍さんお得意の忖度でしょうか。

これまでの歴史を振り返ると、催奇形性が問題となる薬はふつう承認されません。あのサリドマイド禍を忘れてはなりません。当時、サリドマイドはとても安全な薬だと信じられていました。現在、サリドマイドは用途を限定して使われるようになっています。

だから、無批判にアビガンを容認するのはリスクだと思います。妊娠の可能性のない50歳以降や小児に処方限定するなど、慎重な使い方が求められるでしょう。一般の薬局で販売することや、インフルエンザ薬のタミフルのように予防薬として使う、あるいは軽症者や無症状者にもどんどん使うなど、リスクが高すぎると思います。医療者らしく、冷静になりましょう。いかがでしょうか。

5.16.2020. 堤寛